

# お鮨と音楽について

2017/05/17公開の「旬のおたより」ページにおいて、「お鮨」と「音楽」の共通点について触れ、前回「169. 春の押寿司競演」では、その不足点について、補足しようとして書き始めたが、文字数の制約で書ききれなかった。申し訳ない。

そこで今回は、前置きはここまでとし、まとめ切る所存で、早速書き始める。

先ず、音楽の三大構成要素については、従前の通り、「リズム」、「メロディー」、「ハーモニー」に変わりはない。

【リズム】お鮨のお鮨たる定義は、「酢飯」と「ネタ」の組合せとなる。「酢飯」が無く「ネタ」のみであれば、単なる「お刺身盛合せ」に終止するのであろう。「酢飯」と様々な形態（握り、軍艦、押寿司、巻物、手巻き、裏（逆）巻き等）を「音楽」に例えると、テンポや定型的なリズムパターン（ビート）もしくは、ノリに相当し、それら形態の組合せが、一つの「楽曲」の骨格を構成し、ダイナミックレンジを左右することになる。

【メロディー】ネタの種類（バリエーション）と、それを召し上がる順序が「メロディー（旋律）」に相当する。例えば、同じ「ネタ」を10貫続けて召し上がる方はいないであろうし、もし、いらっしゃっても、店側が止める。音楽になぞらえると、あるのはあるのであろうが、ナンセンスであろうし、聴く側としては、辛い。

また、相異なる10種の「ネタ」の召し上がり方の順序（順列）は、計算上10P10の3, 628, 800通りとなる。したがって、「ネタ」の種類と「食べる順序」の組合せを考えると、その順列組合せは、無限大（一生食べ続けても、食べきれない）となる。

【ハーモニー】音楽の場合は、同時に2音以上が重なって、ハーモニーとなるのであろうが、「お鮨」の場合は、同時に2貫以上を口に入れ、それをハーモニーとはしない。1貫の中にハーモニーが（複数）存在することになる。「音楽」は、単音または、1つのコードをもって1楽曲とはしないし、1種以上の単音とコードを少なくとも複数小節続けなければ、「楽曲」として成立しない。「お鮨」も然り。「1貫食べて終り」ではないし、次の1貫は、その直前に召し上がった1貫の余韻を引継ぐことになる。また、1貫1和音を昇華し、1貫1楽曲と解釈すれば「おまかせ」10貫が、ライブコンサートとなる。アンコールもあり得る。「おきまり」であれば、ライブ盤として再現可能となる。

お鮨の注文形態は、概ね「お好み」「おまかせ」「おきまり」に区分されるが、「お好み」の場合は、ほぼ注文者の自作（曲）となるのであろう。計算上も現実的にも食べきれない順列組合せの中から「良き楽曲」に出会うためには、信頼できる専門家に「おまかせ」するか、彼らの造る「おきまり」を選択することに収斂されるのではないかと。